必要である。東京港の場合，海上公園の特性を生かし，現在不足している海洋性レクリエーション施設の充実を図ることが重要だ。千葉港では，他の2港湾には見られない大規模な人工海浜を核に機能の充実を図るとともに，不足している鑑賞型の親水施設を増やす必要があろう。今後，各港湾でこれらの点に留意した開発が進むことで，都市の港湾が人々にとってさらに親しみのもてる海との接触の場となることを期待する。

途上国・途上地域におけるツーリストエリアの形成
—ネパール・ポカラのダムサイドを事例に—

森本　泉

1960年代，航空機やマイクロエレクトロニクスの技術が発展し，また先進諸国における余暇・所得の増加がツーリスト人口の増加を招来し，International Tourismの急速な発展をもたらした。その注目すべき特徴のひとつは，先進諸国から途上国へのツーリストの移動である。途上国にとっては主要な国民経済成長の手段として位置づけられるツーリズムの導入は，他方で負の影響，特に無秩序な観光開発による環境破壊，社会に与える負のインパクト等が問題となっている。本研究のテーマは，International Tourismの成長がもたらす問題を考察する第一段階として，具体的事例からその実態を明らかにすることにある。

ツーリズム現象は，様々な次元で発現される非常に複雑な現象で，研究者の問題意識や研究対象に応じて，適した視点を常に模索していく必要が求められる。本研究では，ネパール第二の都市，ポカラ（Pokhara）におけるツーリストエリアダムサイド（Damside）を事例として選定した。そして，ツーリストエリアの創出・形成の過程を，その形成主体である人たちの視座から明らかにしようと試みた点に特色がある。

1994年の2－3月，7－8月の二度にわたって現地調査を行い，観光関連産業従事者を対象に聴取り調査を行った。また，現地の観光関連産業の集積状況を観察・聴取り調査し，ダムサイドの実態把握に努めた。

ダムサイドにツーリズム関連の諸機能が集積するようになったのは1970年代以降である。その背景として，国際的な観光客供給の点において，1950－60年代以降先進諸国で観光需要が増加したことが挙げられる。いまひとつの背景として，受入側ネパールにおいて，①1959年のチベット動乱を契機に山地民タカリー，及びチベット人がポカラに移住するようになったこと，②1960年代，低地におけるマラリア撲滅運動による可住地の拡大を契機に，低地への全国的な人口移動が始まったこと，③1970年代の道路の敷設によりカトマンズ・インドとポカラが交通網で結ばれたこと，が挙げられる。それらに加えて，ダムサイドに移住してきた人たちの「文化」的背景，具体的には①民族特有の伝統的生業及び価値観，②民族集団内における金融講の存在，③民族集団内のネットワークの存在，がツーリズムを包摂していく要因として機能し，ダムサイドがツーリストエリアとして形成されたと考えられる。ただし，ネパールのツーリズムの黎明期（1950－60年代）にダムサイドが未開であったこと，それに加えてポカラが登山口であり，風光明媚な展望が望めるという位置的利点を前提としている点も看過できない。

調査の結果，ダムサイドに集積している観光関連産業，主として宿泊産業，土産物屋，代理店，外食産業のうち，特に前二者の企業家に関して民族的特徴が顕著であった。具体的には，ホテルの所有者は山地民であるタカリー，グルンが大半を占め，土産物屋についてはカシミール人が多数を占めていた。ただし，土産物屋に関しては，店舗を持たない引き売り形態で多くのチベット人が活動している。ここにおいて特定産業と民族的特徴の相関を考察すると，各民族集団の「文化」的背景が要因となっていることが考えられる。すなわち，タカリーの生業であるバッティ（茶店兼宿屋）経営，カシミール人・チベット人の生業である交易活動がツーリズムに参入することで，現在の形態に至ったと考えられる。

企業家に雇われている従業員に注目すると，民

族的特徴はあまり見られない。一方で，バウンが下働きをしていることなどから，従来のヒンドゥー社会にみられたカーストにまつわる社会的制約が，少しずつ崩れつつあることが窺える。また，ツーリストシーズンである9－3月はツーリズム関連の仕事をするが，雨季には村で農作業をするといったツーリズムの季節性に対応した流動的労働人口が大きいことが指摘できる。全国的な人口移動の中で，ツーリズム産業は安定していないが，格好の現金収入の機会を創出しているといえる。

現在，ダムサイドには外部の大資本が介在しておらず，また地域・国家による統制も充分でない。いわば，自然発生的に創出され，ローカルホストによって形成されてきたツーリストエリアだといえる。現在抱えている問題は，1993年に生じたデモ，洪水，VISA代の値上げ敢行などによって，ツーリスト数が減少したことである。それらの出来事は，途上地域にありがちな政情不安，自然災害，環境破壊，意図不明な政策そのものであり，それによるツーリスト数の変動がネパールにおけるツーリズムに不安定さを助長させている。持続可能なツーリズムの発展のためには，環境的キャパシティに見合った規模で，ツーリストエリアを維持していくことが必要である。そのためには，ツーリズムという産業自体が，ホスト社会の人々にとって選択可能な経済手段となることが望ましい。その一方で，ツーリズム開発が過度にならぬよう，ホストの活動に対する規制が必要となる。

境界域における都市の地理学的考察
――フフホト市を実例として――

ウランドシン

境とは地理学の視点からみると，地域，或いは空間の一種として認識される。又，ある程度の範囲を有することから「境界域」ということができ，そしてそこに位置する都市は，一般的な都市としての性質に加え，境的な都市としての性質をも内包していると指摘できる。

境界域についての研究は，母国（中国）の地理学においてあまり見出せないが，筆者は敢えて未開拓の研究分野に挑戦し，地理学の視点から，事例研究をふまえて境界域の実態を明らかにし，境界域の一般的特徴に考察を加えることを本論文の第一の目的とする。具体的には，筆者の故郷であるフフホト市を事例に，その境界域における都市の特徴を，経済的，文化的側面から客観的に捉え，分析することを第二の目的とする。

方法として，境界域が対立統一（止揚）的な産物であることから，唯物弁証法に基づき，都市がその関連地域の結節点として存在することから，フフホトを周囲の関連地域との関わりの中で，分析していくことにする。現地調査においては，客観的な視角から故郷を認識する努力をし，また当事者としての視角をも併せ持つことを心がけた（客観と主観との視角を併せること）。

従来，地理学において，「境界」に関する研究は，専ら政治地理学の対象となってきた。そして地域区分に関する研究も「境界」に関わっている。しかしこれらの分野の視角から分析した境界は，「線」的なものとして扱っている例が多い。これに対し，筆者の問題意識は，複数の異なる同質地域が接する境界域の内部において，外からの影響がどのように顕れているのか，ということを解明することにする。

境界域は隣接する同質地域と同時に存在する地域空間であり，同質地域の空間的変化における質的変化を反映する地域空間である。そして境界域の中で異質的な要素が混じり合って，境界域の特有な性質が顕れる。動態的な視角から，境界域も変化するものである。

境界として，自然的なものと人文的なものの二つの側面から分析できる。両者の関係は，一般に自然の境界域が人文的境界域の基礎となっていると捉えられている。但し，政治的，行政的境界については，その限りではなく，人為的に決定されることが多く，人々の行動を制約する要因として強く働くという性格を持っている。

中国においては，平原と丘陵が広がる東南部と